
ドーナツの穴でいっぱい

小出 あかり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドーナツの穴でいっぱい

【Nコード】

N3448C

【作者名】

小出 あかり

【あらすじ】

駅前のドーナツ屋を舞台にした、ある女子大生の日常の物語。失恋がきっかけで「食えること」が嫌いになってしまった主人公の相崎奈々子。駅前のドーナツ屋でおいしそうにドーナツを食べる青年・春樹と出会い、話をするうち、奈々子の失恋の傷は癒されていく。。。

駅前には、いつも客で混み合う人気のドーナツショップがあった。

相崎奈々子は、このドーナツ屋のチョコクリームドーナツが大好きだった。

そして時々、大学の帰り道、このドーナツ屋で寄り道をした。コーヒーとドーナツのセットを頼み、1時間ほど文庫本を読むのが、奈々子の楽しみの一つだった。

そんな奈々子が、ある日のある事件を境に、ドーナツが嫌いになってしまった。

いや。

厳密に言えば、ドーナツが嫌いになった訳じゃない。

『食えること』そのものが、嫌いになってしまったのだった。

朝食の塩ジャケも、豆腐も納豆も。トーストもクロワッサンも、カルボナーラのスパゲティも、照り焼きハンバーガーもポテトもサラダも何もかも。

これまで奈々子の大好物だった、エビとマッシュルームのピザやコンビニで買うプリンでさえ、食べるのはおろか、見ることも嫌で嫌でしょうがなくなってしまうた。

私はいつたいどうなっちゃったんだろう？

奈々子は悩んだ。

ものを食わずには生きていけないハズの人間が、食えることを嫌になるなんて、そんなことがあるのだろうか？

奈々子は、自分が信じられなくなっていた。

今日も奈々子は学校で、持ってきた弁当の大半を残してしまった。そして放課後になると、奈々子のお腹は空きすぎて、痛み出してきた。

それでも、食べたいという気は起きなかった。お腹はすいているのに、全く食べたくないのだ。

仕方がないので、コンビニで栄養ドリンクを一本買った。飲むには飲んだが、ただ飲んでいるだけといった感じで、やっぱり味を感じることが出来なかった。

奈々子は、悩んだ。

私はどうしてこんなことになっちゃったんだろう？

どうして食べ物をおいしいと感じなくなってしまったんだろう？ 学校を出た奈々子は家に帰るため、駅に向かって歩き出した。

そして電車に乗って10分。奈々子の家がある駅についた。駅の改札を出ると、そこにはあの、奈々子の好きなドーナツ屋があった。奈々子は、なにげなくドーナツ屋を覗いた。その日のドーナツ屋は、客が少なく、閑散としていた。

店は広い窓から、店内を見渡せる造りだった。明るい店内を覗くと、ドーナツ屋の店員は、ヒマそうに天井を眺めていた。奈々子は目を逸らし、そのドーナツ屋を通り過ぎようとした。

その時だった。

窓際のテーブルに座る一人の男の子が、奈々子の目に入った。奈々子と同じくらいの年頃の男の子は、背が高く、痩せていて、そのせいかテーブルに向かうとひどい猫背になった。

その猫背の彼がむしゃむしゃと食べるドーナツは、・・・なんだかとてもおいしそうに見えた。男の子は、本当においしそうにドーナツを食べるのだった。

それを見ているうちに、奈々子もドーナツが食べたくなくなった。もしかすると、あの男の子のように、ドーナツがおいしく感じられるかもしれない。

奈々子は、ドーナツを試すことに決めた。

以前好きだった、チョコクリームドーナツがいいわ。もしかしたら、「おいしい」という気持ちに戻ってくるかもしれない。

奈々子は、自動ドアを踏み越えて、ドーナツ屋のカウンターへと

近づいていった。そしてガラスケースの中にあった、チョコクリー
ムドーナツを指さし、店員に、

「これを一つ下さい」

と言った。

ドーナツとコーヒーのセットを注文した奈々子は、すいている店
内で適当な席を探し、椅子に座った。そしてカバンを隣の席に置き、
一息ついた。

奈々子は、落ち着いたところで、ドーナツに手を伸ばした。

その味は……。

奈々子は思い出していた。

ああ、これは、私の好きだった味。

表面は油で揚げてサクリ。中は程良くしっとり。チョコクリー
ムがとろけるように舌にからんで、絶妙な甘さが口の中に溶けてい
く感じ……。

奈々子は、考えた。

今、私は、これをおいしいと感じているのだろうか？

奈々子は、もう一度ドーナツをかじった。

そして、再び味をかみしめた。

「おいしい」と感じるには、まだ時間がかかるような気がした。

だけど、「おいしそうだ」と感じた気持ちには、驚いていた。奈

々子はこのことに対し、それは心の第一歩だなと思った。

奈々子は食べかけのドーナツを見て考えた。

さて、これからどうしよう？

せっかく、この店のこの席に座ったのだ。このまますぐに店を出
ることはないだろう。

奈々子は、カバンから一冊の文庫本を取り出した。

いつも通り、本を読もう。

奈々子はドーナツ屋で、本を読み始めた。しばらく読み続け、そ
してきりのいいところまで読んで、栞を挟んだ。

今日は、ここまでにしよう。

そして明日、気が向いたらまたここへ来てみよう、と思った。
もしかしたら、明日は何かが変わるかもしれない……。

奈々子は立ち上がった。

そして、ドーナツ屋を後にした。

次の日の大学の帰り道。奈々子は再び駅前のドーナツ屋の前で立ち止まった。

店の広い窓から店内を眺めると、昨日と同じ場所に、あの男の子がいた。

ひよろりと背が高い彼は、昨日と同じように、猫背になってドーナツを食べていた。むしろむしゃと食べるその顔は、なんともいえず幸せそうだった。

奈々子はしばらくその男の子を見ていた。

ああ、おいしそうなドーナツ。なぜ彼が食べると、あんなにドーナツがおいしそうに見えるのかなあ。

男の子に釣られるように、奈々子は店内に入ってしまった。そしてドーナツ売り場のカウンターに近づくと、ガラスケースの中に入ったドーナツを観察しはじめた。

いくつもの種類が並び、ガラスケースの中。生クリーム入りのドーナツ、シュガーパウダーのかかったドーナツ、潰したピーナツの粉がかかったドーナツ……いろんなドーナツが奈々子の目に飛び込んできた。

だが奈々子は条件反射的に、昨日と同じ、チョコレートクリーム
のドーナツを指さしていた。

「これを下さい」

店員は、奈々子の指さしたドーナツを取り出し、皿に乗せた。奈々子は昨日と同じように、コーヒーと一緒に頼んだ。

いつものように、いつもの席で、ドーナツを食べる。

そしていつもと同じドーナツの味は……。

「おいしい」とは、言えなかった。

奈々子は、不思議に思った。

「おいしい」と感じないのに、私はどうしてドーナツを食べるんだろう？

ドーナツは、また、昨日と同じようにほとんど皿の上に残ってしまった。だが、まだ、家には帰りたくなかった。

奈々子は昨日と同じように、カバンから本を取り出した。

その本は、昨日と同じ本だった。

今読んでいるこの本は、3人の女の子の青春ものだった。アパートで同居している3人の女の子が、それぞれ自分の夢を叶えていくとする物語。そして、奈々子が今読んでいるのは、3人の女の子たちが、意見の食い違いをおこしてケンカになっているシーンだった。

奈々子はしばらくその本を読みふけていたが、途中でコーヒーがなくなったことに気がついた。

奈々子は、本を閉じた。

今日は、ここまでにしよう。

そして、ほとんど手をつけていないドーナツの乗った皿と、コーヒークップを手に、席を立った。返却口に皿を返す奈々子を見て、店員の一人が奇妙な顔をした。

奈々子は、決まり悪そうに目を逸らした。

そしてちらりと、男の子の座っていた席の方を見た。

だが、男の子の姿はなかった。

奈々子は思った。

きつと、もうとつくの昔にドーナツを食べて、出て行ってしまったのね。

奈々子は、そう思いながら、店を出た。

次の日。

学校の帰り道。

いつものドーナツ屋の前に、奈々子はいた。

さすがに3日連続でドーナツを食べようという気にはなれなかった。

だが店の前で窓から店内を覗くと、昨日と同じ位置に、またあの背の高い、ひよろりとした男の子がドーナツを食べていることに気がついた。

ああ、またあの子だね。

奈々子は即座にそう思った。

そしてその男の子がドーナツを食べているのを見ているうちに、またドーナツを試してみたくなってきた。

男の子の、猫背になってドーナツをむしゃむしゃと食べる姿は、奈々子の『何か』に訴えかけるのだ。

奈々子の足は、男の子に釣られるように、ドーナツ屋へと向かっていった。そして、奈々子はいつの間にか、ドーナツの並ぶガラスケースの前にいた。

しかし。

店内に入り、ドーナツの並ぶさまを見ながら、奈々子は後悔しはじめた。

ああ、私は今、ドーナツを食べたいわけじゃない。店の中に入っ
て、いったいどうしようっていうんだろう？

その時だった。

あの、背の高い、ひよろりとした男の子が、ふいに席を立ち、こちらへ向かってやって来た。その彼が、奈々子を見て、声をかけて来たのだ。

「ねえ、君。昨日もドーナツを食べていたね」

奈々子はギクツとした。

まさか、「あなたを見てドーナツを食べてみようと思ったの」なんてことを言うわけにもいかず、奈々子は思わずこんなことを口にした。

「あなたもドーナツが好きなの？ 私も昨日あなたをここで見かけたわ」

すると男の子は言った。

「じゃあ、せっかくドーナツ屋で出会ったんだ。ドーナツを食べて、ドーナツの話でもしよう。今日は僕がドーナツをおごるよ」

奈々子は、しばらくどうしようか迷っていたが、店が混み始めたため、店の入り口で立ち話をしているのも何かと思い、男の子の申し出を受けることにした。

……今日はドーナツはやめようと思っていたのにな。

奈々子は、ガラスケースを覗きながら思った。そして、様々な種類のドーナツを見た。

男の子が隣で、奈々子の注文を待っていた。

奈々子は言った。

「そうね。じゃあ……」

目についたドーナツは、シュガーパウダーのかかった、生クリーム入りのドーナツだった。

「今日はこれにしようかな」

男の子が、奈々子の言葉をつけて言った。

「じゃあ、僕が注文してくるよ。君は席に座って待っていて」

奈々子は、いつも男の子が座っていた、窓際の2人席にやって来た。そして、その席に座った。

しばらくして、男の子がドーナツとコーヒーを運んで来た。2人は並んで、ドーナツを食べ始めた。

「ドーナツが好きなのか？」

男の子が聞いてきた。奈々子は返答に困って、こう言った。

「……私ね、今、ドーナツがあまり好きじゃないかもしれないの」

「えっ？」

奈々子が言っている意味を理解出来ず、男の子は奈々子に聞き返した。

「ドーナツが嫌いなのに、どうしてドーナツを食べているの？」

奈々子は、男の子にこれまでのことを話すかどうか、ためらった。そして奈々子は男の子に名前を尋ねることにした。

「その前に、あなたの名前を教えてよ」

男の子は言った。

「僕？ 僕は楠川 春樹」

名前を聞いて、ちよつと安心した奈々子は、春樹にこれまでのことを話すことにした。

「私が嫌いになったのは、ドーナツだけじゃないの。……食べ物みんな、おいしいと感じられなくなってしまったの」

「どうして？」春樹は聞いた。

「多分、……失恋したせいだと思う」
そうなのだ。

奈々子は、つい最近、つきあっていた彼に「ごめん」と言われ、別れてしまったのだ。

理由は、奈々子の友達だった。奈々子の友達が、奈々子の彼を好きになって、そして奈々子の知らない間に、2人は付き合いはじめたのだった。

ちょうどその頃、奈々子はダイエットをしていた。しかしダイエットはうまくいかず、食べたいものがあると、奈々子はついつい食べてしまっていた。

そして、当然のことながら、奈々子は太ってしまった。

体重計を見て、悩んでいたある日、……彼が別れようと言ってきた。

奈々子は自分がふられてしまったのが、自分が太ってしまったせいだと……そう思った。

その瞬間、まるで魔法がかかってしまったように、奈々子はものが食べられなくなってしまった。

何を食べてもおいしいと感じず、何を見ても食べたいと感じない。それまで好きなものはガマンできずに食べていた奈々子だったが、彼に振られて以来、ものが食べたくなくなるなんて皮肉だなと奈々子は思った。

「友達と彼とは今、どうしているの？」

春樹が聞いた。奈々子が答えた。

「うまくやっていると思う。彼とは会わなくなっただけ、その友達から、彼のことは聞いているから」

「えっ？ 何で？」

春樹はまた意外そうな顔をした。

「彼を奪った友達なのに、まだ友達でいるなんて」

「私、2人のことを憎む気になれないの」

奈々子は言った。

「友達だね、『こんなことになってしまったけれど、奈々子とはずっと友達でいたい』と言うの。私もその友達……ユカリのことを嫌いになれなくて、それで今でも友達なの」

春樹は言った。

「『ずっと友達でいたい』なんて、都合が良すぎるよ。僕ならそんな友達とは付き合うのはやめるな」

春樹の一言を聞いて、奈々子は寂しげにうつむいた。

「でも私、友達があまりいないの。ユカリはいつも私のことを大事にしてくれたし、……それに……」

奈々子はカバンのふたをあけ、今読んでいる本の中から、一枚の栞を取り出した。

その栞は革の栞で、手作りの品だった。革には花の絵が細工されており、下の方に、こんな言葉が書かれていた。

『お互い、幸せになろうね』

それをどうして、奈々子が春樹に見せるのか、春樹にはよく分かっていなかった。

「何を言いたいのがよく分からないよ。だってその友達は、1人で幸せになったんじゃないか」

奈々子は答えた。

「ユカリはね、お母さんが2年前に亡くなって、今はお父さんと2人暮らしなの。私も、お父さんがいないの。2人が出会った時に、お互いの家族のことを知って、それでユカリがこの手作りの栞を作

ってくれたの」

春樹は黙ってしまった。

奈々子は言葉を続けた。

「こんなことになってしまったけれど、私、ユカリの幸せを願ってる。ちよつとくやしかったけれどね。友達でいたいと言われた時、それでもいいやと本気で思えたの」

春樹はしばらく黙って聞いていたが、思い出したようにこう言った。

「じゃあ、僕もいい話があるよ」

そして春樹は、自分のカバンを開けてごそそと探っていた。そして何かを取り出した。

春樹が取り出したのは、100円ライターだった。奈々子は聞いた。

「タバコを吸っているの？」

「吸ってないから、意味があるんだよ」

春樹が笑った。

「これはね、僕が高校の頃に付き合っていた彼女から貰ったものなんだ」

春樹は、ボツとライターの火をつけた。そしてすぐさまそれを消し、ライターの話をはじめた。

「これは、彼女が別れよう、といった時に僕にくれたものなんだ。

『100円ライターの火がつかなくなった頃、きっと私のことを忘れるわ』彼女はそう言っ、このライターをくれたんだ」

「イヤな彼女ね」

奈々子は率直に感想を言った。

「自分から振っておいて、そんな言い訳、私なら聞きたくないわ」

「でもね、その彼女がどうして僕と別れようと言ったと思う？」

奈々子は首を振った。

「そんなこと、分からないわ」

春樹は、続けて話しはじめた。

それは、受験勉強をしている最中のことだった。高校3年になり、2人は大学へ行くために受験勉強をはじめた。そしてそのうち、勉強が忙しくなり、すれ違いが多くなった。彼女は理数系。春樹は文系だった。あるとき春樹は推薦で大学の進学が決まった。彼女は春樹に「おめでとう」と言い、そして別れよう、と付け加えるように言ったのだった。

春樹は、予感していた。

これから進学をして、そしてその後は？

2人には、その後のことまで考えることが出来なかったのだ。そして彼女は春樹に100円ライターを渡した。彼女は言った。
「100円ライターの火がつかなくなった頃に、あなたは私のことを忘れるわ」

春樹は言った。

「僕も、彼女がへんなことを言い出すから、驚いて聞いたんだ。100円ライターなんて、タバコも吸わないのに、使わないよってね」とすると、彼女は言った。

「多分、あなたはこのライターを使わないと思うの。それが私の答えだわ」

彼女の言葉は、一種の謎掛けだった。

彼女のことを忘れる為に、火をつけ続けなければ、ライターのオイルはなくならない。逆に彼女のことを本当に忘れてしまったら、ライターそのものの存在すら、忘れてしまうだろう。彼女の答え、それは結局どんなものだったのかは分からない。だが、今でも春樹はこのライターを見るたびに、彼女が本当に言いたかったことを考えるのだ。

「その話には、続きがあるの？」

奈々子が聞いた。

「あるよ。僕らは結局、別々の大学へ進学することになってしまった」

「それで？」

「彼女はね、北海道の大学へ行ってしまったんだ。……遠距離恋愛するほど、お互い好きだったわけじゃなかったってことなのかもしれないな」

春樹は言った。

「違う大学へ行けば、人間関係も何もかも変わってしまう。恋人よりも、友達といた方が楽しい時もあるし、勉強が楽しい時期もある。今が一番楽しいってことは、多分お互い今が一番幸せってことなんだと思うよ」

奈々子はもう一度、春樹に聞いた。

「彼女からは連絡があつたの？」

春樹は首を横に振った。

「僕らは多分、フェイドアウトしたんだ。ライターはその時の、いい思い出だ」

「でも、なぜあなたが、私にライターの話をしたのか、よく分からないわ」

奈々子が聞いた。

すると、春樹は言った。

「思い出の品には、それぞれ物語を秘めているってことを言いたかったんだ。そして、過ぎたことをきれいな思い出にすることで、明日をもっといい日にしようとする……そんなところに、僕と君の共通点があるような気がしたってことさ」

春樹は言った。

「もう1個ドーナツをおごるよ」

奈々子は笑ってしまった。

「いらないわ。まだ残っているもの」

奈々子は、食べかけのドーナツをかじった。

ドーナツはとてもおいしく感じられた。

ああ、魔法が解けたみたい。奈々子はそう思った。だが、奈々子は最後に食べたドーナツがおいしかったことは、春樹には言わないでおこうと思った。

そして……。

「じゃあ、私はそろそろ帰るわ」

と言つて、奈々子は立ち上がった。

「待つて」

春樹が呼び止めた。奈々子は言った。

「もう、ドーナツのおかわりはいらないわ」

「もう一つ、いい話があるんだ」

春樹がそう言うので、奈々子はもう一度席に座った。

「どんな話なの？」

「ドーナツの穴は、なんで空いているか知ってる？」と春樹。

「知らないわ」と奈々子。

「もしかして、ドーナツの穴の分だけ、材料費を浮かそうとしてい
るとか」

「違うよ」春樹は言った。

「このドーナツの穴はね、とても必要な穴なんだ」

春樹は話をはじめた。

それはある、船乗りの話だった。

昔アメリカに、ハンソン・グレゴリーという船乗りがいたのだ
という。そして、ハンソンの母親は、いつも息子のおやつにフライ
ド・ケーキをつくっていた。しかし、母親のつくるフライド・ケー
キは、いつも真ん中だけが生焼けだった。怒ったハンソンは、最初
から真ん中がなければいいんだ！ とばかりにフライド・ケーキの
真ん中に、フォークで穴を開けてしまったのだ。

「それが、ドーナツの穴のはじまりなんだ」

奈々子は感心して言った。

「じゃあ、ドーナツの穴は、本当に必要な穴だったのね」

春樹はつけ加えて言った。

「空虚に見える何もない部分にも、大事なものが隠されているって
いう教訓さ」

奈々子が席を立った。

「いい話をありがとう。もう帰らなきゃ。ドーナツ、おいしかったわ」

春樹がうなずいた。

「きつと、今日のこういう一日にも、意味があるんだと思うよ」

奈々子は春樹と別れ、ドーナツショップを後にした。振り返ると、春樹が手を振っていた。奈々子も、手を振り替えした。そして奈々子は、軽やかに家に向かって歩き出した。

次の日の放課後。大学の授業も終わり、奈々子は家に帰る途中だった。そしていつもの、駅前にあるドーナツショップで立ち止まっていた。

今日は……どうしようかな。

奈々子は、ドーナツ屋の店の中を覗いた。

だが、春樹の姿はなかった。

「どうしたんだろう？」奈々子はそう思い、ドーナツショップの中へと入っていった。

そして店内をくまなく探したが、やはり春樹の姿はない。

結局店の中に入ってしまった奈々子は、何となく店の外に出ることも出来なくなり、一人でドーナツを食べることにした。

いつもいると思っていた春樹がいない。

いると思ってやって来たのに、その姿がないとなると、なんだか寂しい気持ちになった。

奈々子はガラスケースの前でドーナツを注文し、コーヒーを頼んだ。そしていつものように、空いている席を探して座り、ドーナツを食べ始めた。奈々子はいつも通り、読みかけの本を広げた。

物語は3人の女の子がアパートで同居をし、それぞれが夢に向かってがんばっていく話だった。3人は一時期ケンカをしていたが、仲直りをして、また、いつもの生活をはじめようになった。

だが、その後小説の主人公は、1人だけ夢に挫折しかけた。そこに1人の青年があらわれ、主人公は恋に落ちた。青年は主人公を励

まし、助けてくれようと手をさしのべた。そして夢をあきらめかけていた主人公は、再び夢に再チャレンジをする……というところで、コーヒーはなくなり、そしてドーナツも食べ終わってしまった。

毎日読んでいる本は、毎日少しずつ物語が進展していく。ふと気がつくと、主人公たちは自分の道に突き進み、ハッピーエンドへとがんばってすすんでいく。奈々子は、自分が毎日同じことの繰り返しをしているようでいて、そうではなかったのかもしれない、と気がつき、顔がほころんだ。毎日同じドーナツショップにいて、そして、毎日少しずつ変わっていく。

ああ、私も小説の主人公と同じなんだ、と、奈々子は思った。本を閉じ、カバンの中に本をしまい、そしてテーブルの上を片づけていた奈々子はふと、窓の外で音がしたのに気がついた。

トントン。

ガラス窓が叩かれたのだ。

振り返り、窓の方を見ると、そこには春樹が立っていた。

「やあ」春樹が窓の外で手を振った。

奈々子はあわてて荷物を片づけ、ドーナツショップの外に出た。

そんな奈々子に、春樹が笑いかけてきた。

奈々子は言った。

「今日はいないから、もう来ないかと思ったわ」
すると春樹は言った。

「違うドーナツを探しに行ってたんだ」

「違うドーナツ？」

奈々子が不思議に思っ、春樹の顔をのぞきこむと、春樹は紙袋を一つ取り出し、奈々子の手の上に載せた。

「ハイ、これをあげるよ」

「開けてもいい？」奈々子が聞いた。

「どうぞ」と春樹。

奈々子が袋を開けると、その中に丸いドーナツのようなものが入っていた。

「なにこれ？」

奈々子が目を丸くした。すると春樹は、

「ドーナツの穴の部分だよ。これで奈々子の心の穴も埋まるといいね」と言った。

奈々子は袋の中をのぞき込んだ。

「本当にドーナツの穴の部分なの？」

「ウソだよ」

春樹が笑った。

「本当は、沖縄のドーナツなんだ。サーターアンダギーっていうんだよ」

奈々子も思わず笑ってしまった。

「本当にドーナツの穴の部分を買っていたのかと思ったわ」

春樹は、袋の中に手をつ込み、その一つを取り出した。

「サーターアンダギーはね、中国では『開口笑』って言うんだよ。

お坊さんが大きな口を開けて笑っているように見えるからだって。

奈々子にもこれを食べて、笑って欲しいなと思ったんだ」

春樹はそう言うと、サーターアンダギーを一つ、自分の口に放り

込んだ。そして食べ終わると、くるりと背を向けた。

「じゃあね」

奈々子は春樹を呼び止めた。

「また会える？」

「ああ、きつと明日はいつもの席で、ドーナツを食べていると思うよ。ヒマだったら声をかけてよ」春樹は言った。

「ドーナツの穴がいっぱい埋まったわ。ありがとう」奈々子は言った。

春樹は笑ってこたえた。

「明日は、穴のあるドーナツを食べよう」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3448c/>

ドーナツの穴でいっぱい

2010年10月8日15時21分発行